

---

## 特集 徳島大学の医学教育を考える

---

### 【巻頭言】

泉 啓 介 (徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部生体防御腫瘍医学講座環境病理学分野)  
桜 井 え つ (徳島県医師会女性医師部会)

平成16年度から初期臨床研修制度が開始され、平成17年度から臨床実習開始前の全国共用試験(CBT, OSCE)が正式に実施されている。これら2つの制度の導入により学生の意識は変わり、平成15年度に設けられた MD-PhD コース(本学では4年次終了後3年間大学院博士課程に入って医学研究を行う)への進学は困難になっている。基礎医学志向の学生は益々減り、国立大学法人化後の定員削減計画が後押しする形で医学教育・研究の人材確保が難しくなりつつある。また、初期臨床研修を終えた卒後3年目以降の医師の研修先が以前とは違ってきて、都市・地方の医師の偏在化と地方大学病院の医師不足、診療科別の医師の偏在化が起こっている。女性医師の社会復帰問題を含めた対応も迫られる事態になっている。

徳島大学の医学教育は、一つの方向性として優秀な臨床医養成を目指して行われている。しかし、このまま進

んでゆくと米国の制度だけをまねた医師養成校になってしまう危険性がある。本学医学部の発展のためには研究マインドを持った医学生の育成が行われるべきであると考えている。現在、教務委員会では平成19年度からの医学科新カリキュラムを作成中であり、徳島大学の医学教育のあり方を考えるためにこの特集を計画した。今後の徳島大学の卒前・卒後教育をどうすべきかといった視点で、学内外の6名に、1)基礎医学教育、2)臨床医学教育、3)eラーニング、4)MD-PhDコース、5)女性医師と生涯教育、6)卒後医学教育と大学院についてそれぞれの考えを執筆していただいた。特にまとまりのある結論を出したかったわけではない。少ない人員で教育以外にも研究・診療に携わらねばならない現状をふまえて、本学の医学教育をどうすべきかということを考える上で参考になるものと期待している。